

50周年の思い出

伊 阪 実 人

北陸病害虫研究会が設立されて半世紀を経過したとのこと、記憶を頼りに回想してみました。

私が福井県農業試験場に奉職したのは昭和27年で、今から丁度50年前になります。第1回研究発表会は昭和24年2月で、研究会報第1号の発刊は昭和25年1月ですから、53年を経過したことになります。

半世紀前の記憶はかなり薄らいではありますが、やはり就職してまもなくであり、若かったときのインパクトとして忘れがたい記憶は歴然としております。私が初めて研究会に参加したのは昭和28年3月、北陸農業試験場における第5回研究会でした。その時の研究発表の内容は会報の第3号に搭載されました。

当時の研究会を引っ張り運営していたのは、北陸農業試験場が中心に、各県の病害虫関係責任者でした。北陸農試では田村市太郎、小野小三郎、飯田 格、長野農試の栗林数衛、新潟農試の上田勇吾、富山農試の望月正巳、石川農試の池屋重吾、川瀬英爾、福井農試の友永 富、の方々が記憶に残っております。

当時は米の増産に国全体が力を入れていましたし、特に稲作地帯の北陸地方では稲の病害虫に関する研究が主体でした。各県とも病害では稲熱病に関する研究が主であり、害虫ではニカメイチュウ、クロカメムシ、ウンカ類、イネカラバエ等でしたが、麦類、果樹、特用作物などの病害虫についても特徴あるテーマを取り上げていて、活発な発表の内容にとっても興味を持ちました。

発表テーマは年代が進むと共に各県の特徴が次第に濃くなり、またその時代の農政のあり方も反映してきました。

毎年の研究会の後は恒例の懇親会を催しますが、この場合は若かった私にとってとても有意義であり楽しい機会でした。つまり前述した各大御所との話ができましたことは勿論、新鋭の人たちや同類の方などと知り得たことは人間関係の絆と共に、研究上にも大きな影響を受けたと思われまます。

研究会での思いで話は尽きませんが、やはり当時の大御所の思い出は格別です。北陸農試の田村さん、小野さん、飯田さんは絶妙な司会や話し方で私たちを退屈させませんでした。研究会後の宴会での出し物も本場五木節以上でした。長野農試の栗林さんは田圃でオシッコをしていた時、いもち菌の胞子が飛散しているのを見つけ、胞子採集による発生予察の大論文を書いたと聞きました。あの小さい体のどこからこれだけのエネルギーがわくのか不思議でした。新潟農試の上田さんは話題豊富で評論家でしたし、富山の望月さんは野ネズミの研究を詳細になされていて、その第一人者の印象でした。石川の重屋さんは重厚でしたが暫くで退職されたようで、病理は田村 実さんと笹野市蔵さんがよく発表されていました。害虫の川瀬さんはクロカメムシの試験に取り組んでおられ、お話は活発で話題豊富、諸々の話内容にはいつも笑いを誘いました。堅物と評されていましたが福井の友永さんとはよく話しが合ったようで、共にクロカメムシをテーマにしていた関係かもしれません。友永さんは私の上司でもあり、その厳しさは身に伝えることが度々でした。同僚達と陰口をたたきストレス解消に努めたことが、今は感謝と共に思い出として残っております。